



👁️👁️ みどころ

『007』シリーズは本来1作完結型だが、22作目には21作目の続編的要素が。それはズバリ復讐！さあ、そのターゲットと今回新たに登場する恐るべき敵とは？1時間46分の編集はうれしいが、ド派手なカーチェイスなど、あなたの動体視力は大丈夫？慰めとは？報酬とは？そんな意味をかみしめながら、真面目に変身したジェームズ・ボンドと、大きくサマ変わりしたボンドガールの生きざまをしっかりと味わおう。

真面目派ジェームズ・ボンドの内面に注目！

『007』シリーズは前作の『007/カジノ・ロワイヤル』（06年）で21作目となり、ダニエル・クレイグが6代目ジェームズ・ボンドを襲名したが、それまでの20作から大きく様変わりしたのはジェームズ・ボンドが急に真面目になったこと・・・？特に21作目は「ブリーケル」（続編だが、時間的には前の話となる場合に使われる言葉）で、ジェームズ・ボンドの誕生物語に焦点をあてたものだったこともあり、ボンドが美女ヴェスパー・リンド（エヴァ・グリーン）に捧げる愛の姿を見ていると、一瞬純愛ドラマと見まちがうばかり（？）だった（『シネマルーム14』14頁参照）

今回のジェームズ・ボンドは、前作でヴェスパーを失った心の痛手を引きずっている男。したがって、ヴェスパーを背後から操っていた組織の一員であるミスター・ホワイト（イェスパー・クリステンセン）に対する尋問において、上司のM（ジュディ・デンチ）から私情（復讐心）の存在を指摘される始末だが、さてジェームズ・ボンドの本心は？

『007』シリーズ21作目、そしてダニエル・クレイグのジェームズ・ボンド2作目

となる『007/慰めの報酬』は、前作に続いてそんな人間味溢れる、真面目派に変身したジェームズ・ボンドの内面に注目！

上演時間VS動体視力

映画の上映時間は2時間が標準だが、大作、話題作になると当然長くなる。ちなみに『007/カジノ・ロワイヤル』は2時間24分だったし、現在公開中の『レッド・クリフ』(08年)は2時間25分だがこれは「PART1」だけ。赤壁を真っ赤に焦がす80万の曹操軍敗退の大スペクタクルは「PART2」にご期待という趣向になっている。ところが本作は106分と短いから意外。登場人物が少なくテーマがシンプル、そしてハイライトシーンが少なければ2時間弱に編集することは可能。しかし、きっと本作はその逆だから2時間弱に編集するのは本来困難なはず。

近時スポーツ選手の目をめくって動体視力の議論が盛んだが、これはボールの見極めのみならず、スクリーンを見るうえで該当する。つまり、あまりにも早いスピードで画面が動くと、衰えた動体視力ではそれについていけないことになる。映画冒頭のアストンマーティンとアルファロメオとのカーチェイスや、洋上でのボートの追跡シーン、さらにボンドが操縦するオンボロ飛行機と新鋭戦闘機(?)との死闘などの各シーンを観ていると、私の動体視力の衰えを実感せざるをえないが、考えてみれば、そう感じるのはいくつではないのでは・・・?つまり、2時間弱に編集してもらいたいのだが、『007』シリーズを楽しみにしているのは動体視力のいい若者ばかりではないことを少し考慮してもらわなければ・・・。

際立つスケールのデカさ！

アメリカ発の金融危機はアメリカ国内のみならず、西欧、東欧、アジア、アフリカなどまたたく間に世界に広がったが、これはイスラム世界などを除いて、世界経済がアメリカ中心にグローバル化しているため。それと同じように、『007』のようなスパイ活動もイギリス国内のみならず、グローバル化していることがこの映画を観ればよくわかる。

イギリスの諜報機関MI6に所属し、殺しのライセンスを持ったスパイであるジェームズ・ボンドとその上司のMは、ミスター・ホワイトの尋問とその後の思わぬ展開によって、想像をはるかに超えた巨大なヤミ組織が存在していることを認識せざるをえなかった。その捜査のためにハイチに飛んだボンドが、そこで知り合った謎の美女カミーユ(オルガ・キュリレンコ)を通して接近したのが、組織の幹部であるドミニク・グリーン(マチュー・アマルリック)だ。どうも、今回はこいつが悪の根源らしい。

もっとも、彼の表の顔は慈善団体グリーン・プラネットのCEOだから、その行動範囲もグローバル。そのためボンドのその後の活動の舞台も、ボリビア、ハイチ、オーストリア、イタリアなどに広がっていくことに。経済も金融危機もグローバル化なら、

悪党の活動もそれに対応するスパイ活動もグローバル化というわけだ。

『007』シリーズ22作目は、そんな際立つスケールのデカさに注目！

ボンドガールもサマ変わり？

前作の『007/カジノ・ロワイヤル』でも、「ボンドガールその1 ソランジュは？」
「ボンドガールその2 ヴェスパー・リンドは？」との小見出しで、20作目までのボンドガールとイメージが大きく変わっていることを紹介した。しかして、今回の22作目においてはボンドガールのサマ変わりは明確で、20作目までのボンドガールという呼び名はほとんど死語・・・？だって、後にボリビアの元諜報員で、幼い頃に殺された両親の復讐を誓う女だとわかる謎の美女カミーユは、ボンドと共同して闘う戦友のようなものだから、ボンドガールの範疇に入らないことは明らか。

他方、ボリビアにやって来たボンドをロンドンに送り返す任務のために登場する、ボリビア駐在の女性諜報員フィールズ（ジュマ・アータトン）とボンドが一夜を共にしたのは、女好きのジェームズ・ボンドの面目躍如たるところだが、これは気心知れた仲間同士でのちょっとしたお楽しみ。20作目までのジェームズ・ボンドなら、敵側の女でもいまい女となれば見境もなくアプローチしていたことに比べると、身内の女ですませている本作ではボンドガールも大きくサマ変わり・・・？

ボリビアってどんな国？

この映画では、南アメリカにあるボリビア（正式にはボリビア共和国）が重要な舞台となるし、ボリビアの元独裁者メドラーノ將軍がキーパーソンとなる。すなわち、グリーンからボリビアの政権奪取を持ちかけられたメドラーノ將軍は喜んでこれに応じようとしたが、そこにはきっと何らかのグリーンの企みがあるはず。他方、このメドラーノ將軍こそカミーユの父親を殺害し、カミーユの母親や姉をレイプした男で、カミーユが復讐のターゲットとして狙っている男だ。グリーンが調査を依頼していた地質学者が死んでしまったのは、きっとボリビアの砂漠の中で何らかの貴重な情報を得たためだが、それはひょっとして石油？それとも・・・？

キューバ革命の指導者チェ・ゲバラはボリビアに潜入してボリビア革命を指導したが、残念ながらそれに失敗し、戦死してしまった話は有名。さらに、08年9月2日に観た『敵こそ、わが友～戦犯クラウス・バルビーの3つの人生～』（07年）では、ナチスドイツの元親衛隊保安部（いわゆるゲシュタポ）の隊員であったクラウス・バルビーが、ナチスドイツの崩壊後ボリビアにおける軍事政権と民主主義を求める民衆との戦いに大きく絡んでいたことを知ってビックリ。バルビーの活躍を解くカギが、全く海に面していないボリビアでバルビーが設立した「ボリビア海運社」だったが、『007/慰めの報酬』では、グリーンがそれとよく似た企みを・・・？

とにかく、南米のほぼ中央部に位置するボリビアという国は、日本人には馴染みの薄い国だから、しっかり勉強しなければ。

邦題をどう理解？

『007』シリーズ22作目は、原作者イアン・フレミングの短編集『007 / 薔薇と拳銃』に収められている『Quantum of Solace』（小説邦題『ナツソーの夜に』）が原作。そして原題はそのままの『QUANTUM OF SOLACE』だが、「Quantum」も「Solace」も私たち日本人には馴染みの薄い単語。そこで辞書を調べてみると、多分「Quantum」は「分け前」、「Solace」は「慰め」の意味だから、直訳すれば「慰めの分け前」。したがって、『慰めの報酬』という邦題はほぼ原題を直訳したものだ。

しかして、この映画は前作でヴェスパーを失ったことによるボンドのミスター・ホワイトらの組織に対する復讐と、今回新たに登場したカミーユのメドラーノ将軍への復讐が大きなテーマだが、そんな復讐が果たして心の慰めになるの？そしてまた、そんな慰めの報酬とは一体ナニ？意外にわかったようでわかりにくい邦題だから、その意味をしっかりとかみしめなければ・・・。

2008（平成20）年11月13日記

経済学からみる『007 / 慰めの報酬』は？

私は秘かに『シネマから学ぶ法律』の出版を狙っているが、日経新聞は既に中島茂弁護士の「リーガル映画館」を連載中。他方、朝日新聞は映画評論家・エコノミスト宿輪純一氏の「スクリーン経済学」を連載しているが、さて経済学から『007 / 慰めの報酬』をみれば、どんな視点が？

09年1月24日付連載によれば、それはズバリ「環境問題」。もっとも、「環境」というと、まず地球温暖化が頭に浮かぶが、実は『水問題』のほうが人類の生死にかかわり緊急性が高いらしい。海水を淡水にするにも巨額のコストがかか

るから飲み水の問題は深刻で、水の循環的再生が強く求められるのは当然。したがって、世界で約12億人が安全な水を飲めないという現状をいかに解決するかが、「宇宙船地球号」の最大の課題だというわけだ。

そう考えると、ジェームズ・ボンドの敵グリーンが南米のある国の政府転覆のために水を狙ったのは、悪人ながらいかにも目のつけどころがシャープ！ボンドも愛に生きるだけではなく、その阻止のため身体を張って頑張らなければ！

2009（平成21）年6月2日記